月刊ウィーン GEKKAN-WIEN　Mai 2019　令和元年５月号　Nr. 356　gegründet 1989　平成元年創刊

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊31年目 Nr. 356
2019年5月号

Anthonis van Dyck　Porträt der Maria de Tassis, um 1629/30　Öl auf Leinwand

© LIECHTENSTEIN. The Princely Collections, Vaduz–Vienna

杉本純の 原子力の話 II ウィーンと京都 89

第五二回原産年次大会が四月九日、東京国際フォーラムで開幕した。一〇日までの二日間、「原子力のポテンシャルを最大限に引き出すには」を基調テーマに幅広い議論が展開された。開会に際し、今井敬・原産協会会長が所信表明に立ち、まず、八年が経過した福島第一原子力発電所事故に伴う被災地の現状に関し、翌一〇日に大熊町の避難指示が一部解除されることを「大変うれしく思う」と述べ、原子力産業界として引き続き福島復興・再生への取組が図られることに期待を寄せた。

今井会長は、自然災害が猛威を振るう昨今の気象状況を振り返り「地球温暖化問題への対応は待ったなし」と警鐘を鳴らし、日本がパリ協定で宣言した温室効果ガス削減に関する国際約束を履行するためにも、「二酸化炭素を排出しない原子力の活用は不可欠」と強調。その上で、第五次エネルギー基本計画に基づき「二〇三〇年エネルギーミックス」が掲げる「原子力比率二〇～二二％」を達成するため、「今後一〇年で三〇基程度の原子力発電プラントを運転する必要がある」として、再稼働とともに、運転期間の延長や原子燃料サイクルの早期確立や二〇五〇年を見据え、新増設・リプレースの必要性も指摘した。

https://www.jaif.or.jp/190409-1

原子力の安全性向上を巡る動きとして、今井会長は、昨年七月に発足した原子力エネルギー協議会について触れ、「原子力産業界の代表として強いリーダーシップを発揮して欲しい」と、今後の活躍に期待を寄せた。また、原子力産業界を支える人材の育成・確保に向けて、今井会長は「イノベーションによる夢のあるプロジェクトの構築」を掲げ、魅力を発信していく必要性を強調した。

国際原子力機関（IAEA）の事務次長・原子力科学・応用担当のナジャト・モクタール氏の特別講演では「原子力科学技術：持続可能な開発目標（SDG）への貢献」をテーマに発表した。IAEAが取り組む九つのSDGに関して事例を挙げながら原子力科学技術が社会に果たす役割を紹介。がん治療など医療への応用、環境やエネルギー産業の発展などが語られ、今後はさらに多くのSDGへと取り組みを拡大していくとした。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市が生んだ生年が近い著名な画家（その二）について述べる。エゴン・シーレは、一八九〇年、ウィーン近くのトゥルンで生まれ、幼少の頃から絵画の才能を発揮した。一五歳の時に鉄道員の父が病没すると叔父に育てられ、翌年クリムトと同じウィーン工芸学校学び、さらにウィーン美術アカデミーへ進学した。しかし、同校の形式主義を嫌いクリムトに師事する。一八歳ではやくも個展を開き、翌年には同校を退学し、自らのアトリエを開く。彼の芸術へのテーマは「死と生」そして「エロス」。彼の絵は、恐れや不安に慄いているものばかり。一九一八年、シーレは第四九回ウィーン分離派展に五〇点以上の作品を展示し、世間の注目を集めるようになった。しかし、同年流行したスペイン風邪により、妻エディトの三日後にシーレも死去。享年二八歳。数多くの作品は、今も多くの人の心をとらえて離さない。

一方、堂本印象は一八九一年、京都に生まれ、一九一〇年に京都市立美術工芸学校を卒業後は西陣織の図案描きに従事した。日本画家になることを目指し、一九一八年に京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）に入学した。翌年に初出品した「深草」が第一回帝展に初入選し、第三回展では「調鞠図」で特選、第六回展の「華厳」では帝国美術院賞を受賞するなど一躍画壇の花形となった。その後も西山翠嶂に師事し、次々と話題作を発表して画壇に確固たる地位を築いた。絵画専門学校の教授として、また私塾東丘社の主宰者としても多くの後進を育成し、四四年には帝室技芸員となった。戦後は、独自の社会風俗画により日本画壇に刺激を与えた。五五年以降は抽象表現の世界に分け入り、その華麗な変遷は世界を驚かせた。多くの国際展に招かれ、六一年には文化勲章を受章し、七五年に没するまで近代日本画の発展の一翼を担った。各地の寺社仏閣の障壁画にも多くの作品を残した。

余談であるが、ウィーン駐在時に最も多くのシーレ作品を保管しているレオポルド美術館やベルヴェデーレ上宮の常設展示の『死と乙女』などをよく観た。京都では京都国立近代美術館にある堂本印象の『訶梨帝母』などを観た。両市の生年が近い著名な画家にまつわる話を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部に撮影をお願いしたシーレが住んでいた家の銘板の写真を掲載させていただく。

■杉本純　元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長■

杉本純の原子力の話 II「ウィーンと京都」の第１回からの全記事が次のサイトに掲載されています： http://wattandedison.com/Sugimoto.html

Der erste Bösendorfer ベーゼンドルファー 1869 年 宮中での初演奏

１年間の船旅を経て 150 年前にオーストリアから日本に（明治皇后に）贈られたベーゼンドルファーのピアノ。その時、宮中で最初のピアノコンサートでは誰が何を演奏したのか…。

1869 年の日墺修好通商航海条約締結時にオーストリア・ハンガリー二重帝国から明治天皇に献呈されたウィーン・ベーゼンドルファー社製グランドピアノと同じモデルのピアノ（Konzert-Flügel Ludwig Bösendorfer Wien 1874）を使って、1869 年 10 月 21 日の皇居における最初のピアノコンサートを再現すべく、その時演奏されたヨハン・シュトラウス「アンネンポルカ」、メンデルスゾーン「ヴェネチアのゴンドラの歌」などのほか、日本初の音楽留学生幸田延（1870-1946）がウィーンで作曲したヴァイオリン・ソナタなど、古楽器によるコンサートが、ウィーン楽友協会ブラームスザールで開催された。コンサートに先立ち、楽友協会資料室のオットー・ビバ室長による講演が行われた。